

お互いを必要とする関係の中で生きること

福井県立大学
看護福祉学部教授 奥西 栄介

新型コロナウイルスが人の生活に、そして、人の生活を支える福祉、介護の担い手に大きな影響を及ぼしています。寄せられた56のエッセイを読ませてもらい、災禍に対して自身を鼓舞し、未来に希望を抱こうとする投稿者の意志に感銘を受けました。翻って、どれほどコロナによって人と人の関係が切断されていったことか、その悲しみ、やるせなさ、口惜しさが行間から滲み出ているようにも感じました。

福祉・介護は、人と人との豊かな社会関係を紡いでいく仕事です。普段のルーティンワークに埋もれていた、この仕事を選び、続けてきたことの動機を意識するプロセスがエッセイにこめられているように思えました。それは〈利用者―サービス提供者〉というサービス利用の契約関係の枠組みを一旦解除して、お互いが支え合い、協働していくこと。お互いに愛おしく思い、お互いに待ち合っていること。お互いが場と時間を共有し感受すること。さらに、かけがえのない個人として、お互いを必要とする意志に基づいた関係に在るということです。そして、この原初の動機を基盤にして、自身が対人援助専門職であることの矜持が

表されたセンチメンスも見られませんでした。コロナ禍を言い訳にせず、プロフェッショナルとして、利用者への責任を果たしていく真摯な姿です。福祉・介護の仕事の深みに触れた作品でした。



「星の王子様」の作者、サン＝テグジュペリの言葉の中に、職業の尊さは、人と人を結びつけることである、この世の本当の贅沢は一つしかない、人間の関係という贅沢だ、という一節があります。さらに、人間同士が測り知れないほどの距離によって互いに隔てられているとすれば、それは人間が精神を持っているからに他ならない、と述べています。そうであるなら、ソーシャル・ディスタンスという言葉に信頼と希望 A BRIGHT VISION を預託して、人が生きていくにおいて、目に見えない大切なこと、心で見なくてはならないものに思いを馳せてみようかと思えます。人と人が共に生きること、そして、福祉・介護の仕事の本然を再認識した56の一つひとつの〈つなぐ福幸メッセ〉です。